宗教なき時代を生きるために　森岡正博

一九九六年　法藏館

（冒頭二〇頁分公開）

宗教なき時代を生きるために・目次

はじめに　３

第一章　宗教なき時代を生きるために

１　「信仰」に対する違和感　８

２　生と死の新しい考え方　１０

３　科学者の卵たちはなぜオウムへ行ったのか？　１８

４　科学への失望　２２

５　自然科学では扱えないもの　３０

６　新々宗教の「科学者」勧誘パターン　３９

７　私が宗教を信仰できない理由　５１

８　「宗教性」の問題　５７

９　あなたへのメッセージ　６３

第二章　神秘体験とは何か

１　神秘体験が意味するもの　６８

２　「私が変われば世界が変わる」という考え方　７２

３　悟りへのあこがれ　７８

４　力への欲望　８１
５　神秘体験と信仰の狭間で　８９
６　私の神秘体験　９６
７　「気功」の共同体での体験　１１０
８　閉じた世界で働く心理　１１９
９　「我々だけが正しい」という甘い蜜　１２５
１０　敵は自分の内側にいる　１２９
１１　煩悩の哲学　１３３

第三章　癒しと救済の罠
１　オウム真理教と尾崎豊　１３８
２　宗教へ向かう尾崎の音楽　１４１
３　ほんとうの自分を求めて　１４７
４　癒しとしてのロックンロール　１５７
５　尾崎を殺したのはだれか？　１６５
６　責任転嫁の共同体　１７３

第四章　私が私であるための勇気
１　効かない処方箋　１８２
２　宗教以外の方法　１８８

３　宗教と現実のズレ　１９１
４　こちら側の〈目隠し構造〉　１９８
５　フェミニズムが突きつけるもの　２０２
６　オウム事件の本当の意味　２０５
７　「謎」に向かって自分を開く　２１１
あとがき　２２５

宗教なき時代を生きるために

【数字】は頁の変わり目を示す

はじめに

宗教なき時代を生きるために。

そのために、私はどうすればいいのだろうか。

生きる意味とは何か、私が存在するとはどういうことか、これらの問いに自然科学は何も答えてくれない。

しかし、それらの問いに解決を与えてくれるという宗教を、私はけっして信仰することができない。

科学にも満足できず、かといって宗教の道にも入ることのできない、この宙ぶらりんの私は、どうやってこの世界で生きていけばよいのだろうか。

一九九五年におきたオウム真理教事件は、私にとって、とても重い出来事だった。その事件をきっかけとして、私は、生命とは何か、この社会のなかで生きることの意味は何かを、繰り返し考えた。

この本で、私が執拗に追い求めたのは、「オウム真理教とは何であったか」という問いではなく、「オウム真理教の時代【3】

を生きなければならない〈私〉とは何か」という問いである。

なぜなら、オウム真理教事件が我々にほんとうに問いかけているのは、「オウムとは何か」ということではなく、「オウムを見てしまったあなたとは何者なのか、あなたはあしたからいったいどういうふうに生きていくのか」ということだからである。

科学に満足することもできず、宗教の世界にも入れない人間が、「生きる意味」や「ほんとうの自分」について自分の目と頭で考えようとするとき、その人はどうしようもない孤独に落ち込んでしまう。なぜなら、そういった根本問題に対する解答を、自分自身の内側から発掘してこなければならないからである。

それは、とてもつらく、しんどい作業だ。

でも、そういう作業を孤独のうちに続けているのは、けっしてきみひとりではない。この広い世界のなかには、きみと同じ苦しみに耐え、きみと同じ穴ぼこのなかでもがいているたくさんの人々がいるはずだ。

この私もまた、そのなかのひとりである。

だから、そのような「ひとりで立とうとする」人々のかかえる孤独を、多元的にささえあい、遠くからはげましあってゆく何かの仕組みが必要なのだ。閉じた癒しの共同体を作るのではなく、孤独のささえあいのなかから希望を見出していくこと。【4】

世紀の変わり目を前にして、いま「哲学ブーム」なのだという。しかし、たんに、哲学史や思想史を、分かりやすいことばで整理しなおすことが哲学なのではない。哲学とは、いまここで一回限りの生と死を生きているこの私が、その全存在を賭けて、世界のあり方と、生きることの意味を、自分自身の頭とことばで考え抜いていくことであるはずだ。

私が本書で行なうのは、そのような試みなのである。

オウム真理教事件を、どのくらいの深さで受け止め、それと対決してゆくのか。この点に注目することで、同時代を生きる思想家のことばが、本物であるか、偽物であるかが明らかになるであろう。【5】

第一章　宗教なき時代を生きるために【7】

1　「信仰」に対する違和感

私の身近にも、宗教を信仰している友人がたくさんいる。

彼らはみんないい人ばかりだ。人格的にも私なんかよりずっとすぐれているし、日ごろの行ないもすばらしい。それにくらべると、私なんか、くだらない人間だ。そう思わざるを得ないこともしばしばある。

ただ、彼らとつき合っているときに、ふと違和感にとらわれることがある。それは、彼らがもっていることの多い、「絶対の真理がすでに誰かによって説かれている」という感覚だ。ふとしたことばの裏に潜むそのような感覚に出会ったときに、私はいつも無限の距離を感じてしまう。「絶対の真理がすでに誰かによって説かれている」。そういう感覚を、私はけっしてもつことができない。こんなことを言うと、宗教をもった友人たちからは、きっと見放されてしまうだろう。でも、やっぱりここは確認しておかなくちゃいけない。「絶対の真理は、まだ誰によっても説かれてはいないし、今後もけっして説かれはしないだろう」。これが私

にいちばんぴったりくる感覚である。もちろんこの私の感覚に根拠がないのは、言うまでもない。

こんなことを書くと、「じゃあ、あなたは絶対の真理を求めたり、悟りや救いを求めることはバカげているとでもおっしゃるのですか」と反論されるに違いない。でも、この質問に対しては、私ははっきりとした答えをもっているのだ。私は思っている。絶対の真理を求めたり、悟りや救いを求めたり、それを得るために修行したりすることは、ほんとうにすばらしいことだ。どこか【8】に絶対の真理があるのではないか、どうすれば私はこの苦しみの多い人生から救われるのか、この世で生きる目的はいったい何なのか、そういう問いに突き動かされてもだえ苦しみ、その解決を求めて修行する人間の姿は、人間が示し得るもっとも高貴な姿だと私は思う。

すべての宗教の底辺にあるこのような人間の情念を、私はけっして否定したりはしない。そういう情念は、ほかならぬこの私自身の内部にもあるし、ある意味では私自身の学問の動機となっているとも言える。だから、それがバカげているなんて、ちっとも思わない。

ただ、そういう真理がすでに誰かによって説かれている、という感覚だけは受け入れることができないのだ。あとで述べるよう

に、これは、私が科学というものにどっぷりと浸っていた時期があるからかもしれない。科学は、いま手にしている知識がつねに中途半端なものであるということを前提としている。だから科学は、つねに前に向けて進まなければならない。科学とは、いまだ知られていない解を求めて突き進む、その無限のプロセスのことである。科学に終わりはない。科学は、だから、最終的な真理を知ることができない。

もちろん、「宗教」の中にも、そういう絶対の真理を求めて修行していくその無限のプロセスこそが宗教の本質なんだ、という立場はある。それは認めよう。でも、そういう立場をとる宗教だって、その宗教の開祖が絶対の真理を獲得して、あるいは真理を神から与えられて、それを弟子に向かって説いたという事実は否定しない。それを否定すると、その宗教の根底が崩れてしまう。しかし、まさにこの一点に、私は乗れないのだ。

私が生と死の問題にとりつかれながらも、宗教に行けないいちばん大きな理由は、私が宗教を【9】「信仰」することができないからである。他人を信頼したり、好きになったり、誰かが言ったことを信じることはできる。しかし、宗教の「信仰」だけはできない。「信仰」にも様々な位相がある。宗教の開祖が指し示す「絶対の真理」というものをそのまま信じることも信仰である。

あるいは、教祖の言われるとおりに導かれることで私が救われるということを、そのまま信じることも信仰である。あるいは、絶対的な真理に到達できない私の限界をありのままに見つめることで、逆に超越者の存在を受け入れていくのも信仰である。

しかし私には、それらすべてができない。

ほとんどの宗教が、教祖や教義や超越者への信仰を核にして成立している。キリスト教やイスラム教などもそうだし、日本仏教の浄土真宗や日蓮宗などもそうだ。もちろん、土着の習俗と混合したライフスタイルのなかに根付いている道教や神道などの場合は、信仰というファクターが少なくなる。「信仰なければ宗教にあらず」という考え方がおかしいということは、宗教社会学のなかで言われ続けてきた。それはたしかに一理ある。しかし、かなり多くの宗教が「信仰」を中核において成立していることは事実だし、「信仰」を足場とすることによって、宗教は大きなパワーを発揮してきたのだ。

2　生と死の新しい考え方

もういちど整理しょう。

私は、生と死の問題にこだわり続けてきた。しかし、それを宗

教の道を通って探究することは【１０】できない。なぜなら、私は、「誰かがすでに語った絶対の真理」というものを受け入れることができないし、そういう真理や絶対者や教祖への「信仰」をもつこともまたできないからである。

こう言うと、「じゃあ、あなたは無神論者、唯物論者、科学主義者なのですね」と問われるに違いない。

私がこの小論で言いたいのは、そういうような、「宗教を信じないものは、即、唯物論者だ」というような二分法をやめてくれませんか、ということである。この点は、私にとっては、とても大事なことなのだ。「私は宗教を信じていませんが、しかしながら唯物論者ではありませんよ。私は宗教を信じていませんが、科学主義者じゃありません。そして私は宗教を信じていませんが、無神論者でもありませんよ」。こういうことを、平然と言えるような世の中が、はやく来てほしい。

ある学者は、「空中浮揚はないのだし、あの世は存在しないのだし、神は存在しないのだ」と断言するが、私はそうは思っていない。空中浮揚があるかないかは、その事実がみんなの前にあらわれるまでは誰にも断定できないはずだし、あの世が存在するかどうかを客観的に証明するのは不可能だし、神が存在するかどうかを断言するのもやはり不可能である、と私は思っている（めん

どうな哲学論議をするのは避けたいが、あるものが存在しないということと、それの存在を証明できないというのは、別のことである)。

要するに、あの世とか、神様とか、空中浮揚とか、そういうものの存在について、私は判断することができないのだ。あるかもしれないし、ないかもしれない。どっちが正しいかを判断でき【11】ないときには、「私は分かりません」と言うのがいちばん誠実な態度ではないのか。

それに、さっきも言ったように、私は「絶対の真理とはなにか」とか、「あの世はあるのか」とか、「人生の意味はなにか」とか、そういうことを考えていくことを、人間にとって非常に大事なことだと思っている。そういうことを考えないではいられない人間の気持ちはよく分かるし、そういうことを追求していくのが人間存在のひとつの証しだし、私のなかにもそういう情熱はある。

だから、宗教者としてではなく、かといって無神論者でもないようなスタンスで、生と死の問題を考え続け、この世での私の生き方を模索し続けていく、そういった道を私は選びとりたいのだ。

まえからそういう気持ちはあったのだが、今回のオウム真理教事件に遭遇することで、もうこのスタンスを公言してやっていくしかないというところにまで追いつめられてしまった。その意味

で、オウム真理教事件というのは、本当に重かった。生と死の意味を知りたい、解脱したい、超能力を得たいと願った若者たちが、どうして麻原教祖への「信仰」へとからめ取られなければならなかったのか。そうなってしまった原因のひとつは、そういう問題を追求する方法として、いまの社会が「宗教」という窓口しか用意してこなかったことにあるんじゃないか。この世俗世界で現実にまみれて暮らすか、あるいは宗教に入って生と死の意味を追い求めるか、という二分法しかこの社会は認めてこなかったのではないか。だから、そういう問題を悩む人間は、やむなく宗教に入るしかなく、そしてやむなく教祖への絶対的信仰へとからめ取られていったのではな【12】いか。

一方、宗教の扉を叩く勇気がなかった人たちは、生と死の問題についてあれこれ悩むのを中止し、しかたなくこの社会の中で、つまらない日々の仕事に自我を没入させているのではないか。日々の忙しい仕事は、生と死の問題なんていうややこしいものを、目の前から遠ざけてくれる。街に出れば、瞬間的な快楽はいっぱい用意されている。そういう仕事と夜の快楽の繰り返しの中で、ややこしいことなんか忘れてしまえる。そういう人たちは、きっと今回のオウム真理教事件を知ったときに、そういう宗教の世界に入っていたかもしれない自分にふと気づいて、そしていまの自

分の生活を一瞬だけ醒めた気持ちで懐疑したことだろう。あるいは、一九九二年に尾崎豊が死んだときに、社会人として社会に組み込まれているかつてのファンたちも、同じことを一瞬感じたにちがいない。しかし彼らも、そんな振り返りの気持ちはすぐに脳裏から捨てて、あしたから社会生活に戻らねばならない。「この管理社会では、生と死の問題を自分に引き受けて考えている余裕なんかないんだ」。たしかにそれは事実であるが、しかし自分に対する言い訳でもある。

宗教の扉を叩いて「信仰」の生活に入るか、あるいは世俗世界に残って生と死を忘却する生活を送るか。そういう二分法しか用意されていないようにみえる我々の社会って、とっても貧しいのではないか。そのあいだを縫って、第三の道をつけていくことはできないのか。

オウム真理教事件について、山折哲雄は次のような発言をしている。

麻原教祖と対談をしたことのある山折氏のところには、連日のように取材の申し込みが殺到し【１３】た。彼はそういう依頼を最初はことわっていた。マスコミとのやりとりのなかで、山折はテレビのディレクターたちに向かって、「あなたの宗教は何ですか」と聞いてみたという。すると、彼らのほとんどは、自分は無

神論者であると答えたという。山折は書いている。「マスコミ最前線のジャーナリストたちが、宗教の深層に根ざすこんどの大事件を無神論者の眼差しで凝視《みつ》め、報道しようとしている」「もしもそうであるとして、それでは無神論者の眼差しというのはいったいどういう眼差しなのだろうか。それも議論をしていれば果てのないことになるが、たとえば今度の事件を、神や仏の側（すなわちそれを信ずる者の側）からではなく、社会の側（すなわちそれを眺める観客席の側）から凝視め、分析し、説明しようとする眼差しのことだといってもよい」（山折哲雄「無神論者の眼差し」『イマーゴ』一九九五年八月臨時増刊号〈オウム真理教の深層〉、二六～二七頁）。

たとえば、こういう文章にあらわれてくる二分法こそが、私をいらだたせるのだ。

山折はオウム真理教を見る眼差しを、二つに分けている。ひとつは、「神や仏の側」の眼差しである。山折自身が注釈しているように、それは神や仏を信ずる者、すなわち「信仰」する側の眼差しである。

もうひとつは、「社会の側」の眼差しである。山折はこれを、事件を眺める「観客席」の側だと言っている。事件を傍観者として楽しむ、観客席の人間である。

ここにあるような、一方には「信仰」の眼差しを置き、その対極には「観客」の眼差しを置いて、その二分法の図式をもちいて宗教的な事象を見ていこうとする、そういう評論こそが、この【14】世俗世界に残ってなお「観客」ではありえずにオウム事件をわがこととして苦闘している私のような人間を抑圧してゆくのである。自らの身を「信ずる側」に置くこともできず、かといってこの社会の中で、のほほんと「観客席」に座ることもできないでいる多くの人間たちのことを、この図式はきっぱりと無視している。信仰には踏み切れず、世俗世界に残りながらも、しかしながら「神秘」や「生死」や「悟り」などへの情熱を裏切ることのできないそういう沈黙した人間たちが、オウム真理教事件に直面して、どのくらい身を切るようなダメージを受けたことか。

私には、一歩間違えれば、オウム真理教に入っていたかもしれないという切迫感がある。オウム事件に関する「評論」を読んでいて、いつもいらだちを覚えるのは、それらの「評論」には、そういう切迫感がぜんぜん感じられないからだ。麻原教祖の、あの空中浮揚の写真が表紙になった本を、書店で立ち読みまでして、しかし買わなかったのが私であり、買って熟読して会員登録してしまったのが、たとえば元名古屋支部長のAさんだ（「現代」一九九五年八月号、八〇頁）。どこが違うのか。私もあと一押しだ

ったかもしれないじゃないか。私があの本を手に取ったのは、やはり表紙に使われていたあの空中浮揚の写真に、後ろめたいような興奮を感じたからだ。若者がオウム真理教に惹かれた理由のひとつには、空中浮揚をはじめとする超能力を身につけたかったという動機がはっきりとある。私にはそれがよく分かる。私のなかにもそれは明確に存在していた。私もまた空中浮揚したかったし、スプーンを念力で曲げたかった。同じく空中浮揚するというＴＭ（超越瞑想）にもつよい興味をもっていた。この地点にまで正直にさかのぼらないと、オウム問題は見えてこない（この点については、第二章でくわしく語ろうと思う）。【１５】

もう一度確認しておこう。

この世に生きている意味とはなにか、死んだらどうなるのか、正しい生き方とは何なのか。そういう問いから目をそらすことができず、それに全身全霊をもって向かっていこうとするとき、そういう人間の前に「宗教」の扉しか開かれていないという、この我々の社会は貧しすぎる。そういう問題に立ち向かうためには、「誰かによって説かれた絶対の真理」とそれに対する「信仰」を核とする「宗教」に帰依するか、あるいはそういう問題を考えること自体をやめてしまって、この管理社会のなかで日々の楽しみだけを消費しておもしろおかしく生きていく道しかないという、

この二分法の社会こそがおかしいのだ。

このように言うと、「仏教は、世俗と出家のあいだの第三項として、〈在家〉というものを認めている。だから、仏教を二分法だと言うあなたの見方こそが偏狭なのだ」と反論されるかもしれない。しかしながら、在家というのは、世俗世界に住みながらも、やはり「信仰」への道をめざす人々のことである。この意味で、在家もまた「信仰」を核とした宗教の側に属していることはまちがいない、従って、それは、私の言う第三の道ではない。

別の例をとって考えてみよう。

朝日新聞の記事によれば、逮捕されたオウム真理教幹部の都沢和子は、インタビューに答えて次のように言ったという。「『一番に思ったのは、〈この世はなんて汚いんだろう〉ということです』。外に出て、車の中から眺める景色は、鉄やビルがとても冷たい感じだった。食べ物屋が浅ましく見え、スーツを着た人間が異様に見えた。『何かひもでその人の体がグルグルと縛られて、【16】解放感がないように感じた』と」。

この世っていったい何だろう。人間っていったい何だろう。そういう疑問をもって現実の世界を虚心に眺めてみれば、こういう光景が開けてくるのは当たり前の話である。とても純粋に、世界の情景を観察している。そういう汚く、浅ましく、抑圧的なこの

社会の中で日々生きなければならない私の人生って、いったい何なのだろう。そういう問いかけが、彼女の頭の中にはあったはずである。

そして、そういう問いかけをバネにして、この世で私が生きていく意味や、この社会とどのように対決していくのかについて、自分の目と頭で考え続けていくこともできたはずだ。

しかし、都沢はそういう道を歩まなかった。

彼女は、ひきつづいて次のように語ったという。「今後の課題は、いかにグルの意思に沿って行動するか。グルの意思を百パーセント実行するか、ということです」（朝日新聞、一九九五年八月一六日大阪版朝刊）。

この社会と自分の人生への鋭い反省能力をもったひとりの人間が、自分の目と頭で問題に立ち向かっていく道をではなく、自分の帰依したグルを信仰し、グルのロボットとなって生きてゆく道を選択せざるを得なかったことに、都沢和子の悲劇はあるように思える。そして、彼女がそのような道を選ばざるを得なかったひとつの原因は、やはりこの社会に満ち満ちている例の二分法ではないかと思うのだ。【17】

3　科学者の卵たちはなぜオウムへ行ったのか？

地下鉄サリン事件が起きて、オウム真理教がその犯行グループではないかと疑われはじめたとき、私はその事件を単なるカルトグループの無差別テロとしてしか見ていなかった。その前日まで自分が出張で東京にいたという不気味さは感じたが、それ以上の感覚はもてなかった。

ところが、教団幹部の村井秀夫が刺客によって殺害されたときから、私のスタンスは急激に変わった。ささいなことかもしれないが、村井氏が私と同い年だというのが、とても強くひっかかったからである。それだけではない。彼は大学で宇宙物理学を専攻していたと言うではないか。それから、オウムに転向したという。この事実は、私にとってはきつかった。

オウム報道のなかで、科学技術省というものの存在が、大きく取り上げられるようになる。大学でエリート科学者へのコースを歩んでいた若者たちが、その出世の道を捨てて、オウムの科学技術省に入ってきているらしい。そして、サリンをはじめとする殺人兵器を開発したらしい。どうして、エリート科学者の卵が、オウムなんていうカルト宗教に引きつけられたのか。それが分からない。そういう声を、マスコミが流しはじめた。新聞などでは、わが国の戦後の科学教育が中途半端だったから、そんなことにな

ったのだ。もっときちんと科学教育を行なっていれば、科学とオカルトを結びつけるような科学者なんか出てこなかったはずだ、というような論調もあらわれてくる。

それらの声を聞いて、私は、ああ、とため息をつく。どうして科学者の卵が新々宗教に走るの【18】か、私には分かりすぎるくらい分かる。そして、「その理由が分からない。もっと科学教育を徹底しろ」などと言っているあなた、あなたのような人がいるおかげで、彼らは新々宗教に走るのですよ、と声を大にして言いたい。

いずれにせよ、この科学技術省というものの存在は、私にはとてもきつかった。ちょっと立ち直れないくらいのショックだった。私には、そこに入ってしまった科学者たちの中にあった、人生の問いへの真摯な眼差しも理解できるし、同時にそういう閉鎖空間で化学兵器の技術開発の論理的な可能性に熱中したいという悪魔のささやきもまた身にしみて分かる。私自身がそこにいたとしても、ちっとも不思議ではないという思いがある。

オウム真理教の信者であった高橋英利氏は、河合隼雄、中沢新一との座談会で次のように述べている。オウム真理教に集まってきた人たちには、いろんなタイプの人たちがいる。「超能力が欲しくて入ってきた人、尊師の仏教性や慈愛にひかれた人、病気を

治された人、僕みたいに精神的な追求だとか哲学的な問題を抱えていた人、いろんな人が集まってきているんです」（「イマーゴ」一九九五年八月号、一二頁）。そのひとつのタイプとして、高橋氏のような、大学では理学系の研究をしながらも、人間とか精神の問題に強い興味を覚えてしまうタイプの人々がいる。

高橋氏は、大学生の頃は理学系の地質学科に在籍していた。しかし同時に、人間とは何か、自分とは何かという問題が頭から離れなかった。そんななかで、麻原教祖の講演を聞く。高橋氏はそこで質問をする。自分がいま直面している問題を科学的に探究していくことをどう思うか。その質問に対する麻原教祖の答えは、高橋氏に強い印象を与える。【19】

「あなたが抱えている問題というのは、たぶん科学をやっていても答は得られないでしょう」というようなことを言われたんですね。僕も薄々感じていたことなんですよ。「科学」をやっていても、どうして人間は生まれ出るのかということには答えてくれない。（一〇頁）

高橋氏もまた、宇宙論をやってこの宇宙のことを科学的に調べていっても、なぜ私がこの宇宙に生まれたのかはけっして分から

ないということを、日頃から自問していた。高橋氏は言う。

僕も精神的なものを求めていたために、自分が本当に知りたいのは、宇宙がどうなっているかを写真に撮ることでもなければ、分析機で調べることでもない。自分がどうしてこの宇宙、この世に生まれてきて、どうしてこのようにとらえているんだろうと思うようになった。（一一　頁）

自分がいまやっている科学は、人生の問題、存在の問題には答えを出してくれない。そういう悩みを抱えている科学者の前に、「人間とは何か」「生死とは何か」「存在とは何か」を断定的に、それも簡潔に説いてくれる宗教があらわれたとき、その人間がそういう宗教に惹かれていってしまうのは容易に想像できるはずだ。悩める科学者は、宗教の世界、精神世界にジャンプしやすい。ここがひとつのポイントである。【２０】

オウム医院の林郁夫医師もまた、医学界の若きエリートであった。その彼が、医学界での出世の道を捨てて、オウムへと入ってしまう。報道によれば、林医師もまた、「生と死の問題」を自分なりに深く考えた結果であるという。自分の先端医療技術が、患者さんの魂をほんとうに助けているのか。そういう疑問があった

という。高橋英利氏も、林医師について、次のような感想を述べている。

いま捕まっている林さんは自分がお医者さんだった。人を助けるために仕事をしてきて、人を根本的に助けていないことに気がついた瞬間に、あの人は医者ではなく宗教をやりたくなったんですよ。（一七頁）

その林医師が、地下鉄サリン事件では、サリン袋に穴を開ける実行犯のひとりとして、無差別殺人の当事者となる、誠実であるがゆえの悲劇だ。ほんとうに、彼には新々宗教への道しかなかったのか。

科学者から精神世界への転身。

それは、この私自身のかかえる問題でもある。

私も科学者になることをめざして大学に入学した。そして高橋氏が直面したのと同じような問題を抱え込み、打ちひしがれ、そのあげくに進路を変更して精神世界の探究に入っていった。私の場合は、理科系（理科Ｉ類）から文学部倫理学研究室というところに移ったのだが、その移り【２１】先が、当時学内で活躍していた某新々宗教であっても、はたまたオウム神仙の会であっても

不思議はなかったと思う。文学部に転部しても、大学にはほとんど行ってなかったのだから、その可能性は十分にあった。

引用した高橋英利氏の自分史を読んでいて、彼と私とを分かつものは、ほとんど見いだせない。なにかの巡り合わせが狂えば、私もオウム真理教の幹部になっていたかもしれない、と本気で思うことがある。自己と教祖とのあいだで身動きがとれなくなって、おそらく脱会していたとは思うが、ひょっとしたらサリン生成に立ち会っていたかも。教団幹部や、科学技術省の研究者に、私と同世代が多いということにもけっこうリアリティがある。

私もまたオウム真理教に入っていたかもしれない。この感覚が、今回の事件を見るときの私の基本的なスタンスである。そして、人々がそのような道を選ばなくて済むような、何か別の選択肢が必要なのではないか。そういうふうに、考えていきたいのだ。

4　科学への失望

回り道になるかもしれないが、私自身のことについて書いておかなければならない。私がオウム真理教のような新々宗教に入らなかったのは、なにかの偶然なのか。それとも別の理由があるのか。そこを確かめるためにも、自分自身のことを振り返ってみる

必要がある。私が若いときにたどったパターンは、けっして私ひとりだけのものではなく、同時代を生きた他の人々のあいだにも、きっと共有されているはずだと思うからだ。【２２】

他の場所にも書いたことがあるが、中学・高校のとき、私は数学・物理少年であった。数学の問題を解くのはすごく好きだったし、問題集の解答欄にのっていないようなやり方で解くことを友人たちと競っていたこともある。そしてそれ以上に、物理学が好きだった。数学の手法を使って、世界の成り立ちを一歩一歩解明していく物理学のおもしろさに、わくわくしていた。学校で習う物理学だけではなくて、相対性理論の入門書や、量子力学の入門書なんかを繰り返し読んでいた記憶がある。そして私の関心は、宇宙論と素粒子論へ向かっていった。当時、宇宙論は、ビッグバンセオリーを介して素粒子論と結びつきはじめていた。この宇宙全体がいつどのように始まったのかという研究が、こともあろうに、物質のミクロの究極である素粒子のふるまいによって解明されはじめていたのである。この、マクロコスモスとミクロコスモスの融合という、驚異的な事件が、現代物理学の最先端で起きていたのだ。

その光景は、若かった私のこころをとらえた。私は物理学者になって素粒子論を研究するのだという決心をした。そして宇宙の

姿を解明するのだ。

量子力学が今世紀のはじめに直面した、いわゆる「観測問題」という難問もまた私のこころを強くとらえた。非常にミクロな粒子のふるまいを観測するときには、それを観測する行為それ自体が粒子の運動に影響を与えてしまう。それをどのように解釈するかをめぐって、アインシュタイン、ボーア、フォン＝ノイマンらが対立した。ミクロな領域にはいってくると、見るものと見られるものとは、もはや分離していない。相互干渉しあっている。これはすごい。この謎を解明しなくては。【２３】

高校時代の私は、そういう夢を胸に抱きながら、受験勉強にはげんでいたわけだ。いまから考えてみれば、当時の私は、物理学と「哲学」とを混同していた気配がある。私は、物理学によって、この世界と宇宙と自分の謎を解明できると単純に信じていた。物理学こそが、なぜ宇宙はできてきたのか、なぜ世界はこのような姿をとっているのか、なぜ私はこの世に生まれてきたのか、生と死の意味は何か、といった問題群に最終的な答えを与えてくれると思っていた。物理学は、そういう「全体」の問題に、最終的な答えを与える唯一の学問だと思っていた。そしてその手段として、数学というものが使われる。

私は大学の理学部・工学部進学コースである理科Ｉ類というと

ころに入学した。物理学科への進学は難関だというのは知っていたが、とにかくそれをめざそうと思っていた。

では、高校時代に私がいわゆる理系人間だったかというと、そうでもない。中学のときから、小説ばかり読んでいる文学少年だった。高校になってからは、哲学というものにも、のめり込んでいた。パスカル、ニーチェ、フロイトなどを文学書のように愛読していた。そういうことを語り合う友人はいなかったので、孤独に黙々と読んでいた記憶がある。それらの哲学書をどうして愛読していたかというと、彼らは人間の「生と死」の問題を正面から語っていたからである。これは誰でも覚えがあると思うが、感受性の高い十代の人間にとっての大問題は、セックスと死である。身体中にこみ上げてくる、このどうしようもない性衝動と恋愛感情。これをいったいどうすればいいのか。そしてもうひとつの問いは、私が死んだらいったいどうなるのかということ。私だけが無になるのか、それとも私と一緒に世界もまた消滅してしまうのか。私のいない世界と【２４】はどのようなものか。私はそれに耐えられるか。こういうことを考えはじめると、夜も恐くて眠れない。いくら考えても、答えはどこにも見つからない。いちばんいい解決法は、それを考えないようにすることである。だから、私は、なるべくそれを考えないようにした。しかし、かならず定

期的にその問いは私を襲う。そして私を眠れなくさせる。

だから、当時の私にとっては、こういう「哲学」「宗教」の問い、すなわち死んだらどうなるのか、生命の意味とは何かという問いと、「物理学」の問い、すなわち世界はどのように構成されているのか、宇宙はどのように生成したのかという問いは、なんの矛盾もなく同居していたのである。私は、物理学者になるか、そうでなければ小説家になろうと思っていた。いまの私はこのどっちにもなっていないが、しかし当時の私にとっては、物理学者と小説家は交換可能な存在だったのである。そういう私の自然な発想を切り裂いたのが「理系か文系か」という二分法だった。この「理系か文系か」という制度には、いまだに腹が立っている。これのおかげでどのくらいみじめに苦しんだことか。とうてい許しがたい。

ともあれ、私は物理学者になって世界と宇宙と自己の謎を解明しようと、大学に入学するわけである。

入学したのは一九七七年のこと。学園紛争のなごりも消え失せ、キャンパスには面白そうなことはなんにもなかった。最初は、全部の講義にまじめに出席したが、二カ月くらいでほとんどすべてに出なくなった。大学にはほとんど行かなくなり、悪友と東京の街をさまよう生活となった。

その理由は三つほどある。ひとつは、高校ではトップクラスであったが、大学に来てみるとま【２５】わりはみんな自分と同じくらい勉強ができるやつばっかり。その中でさらにがんばって勉強してトップに立つ意欲がそがれてしまった。これがドロップアウトの第一の理由。もうひとつは、私の中で抑圧されていた青春の炎が一気に堰を切って燃えさかってしまったこと。受験勉強で彼女ひとり作れなかったことへの後悔と、その取り戻しのほうに私は燃えてしまったと言える。以上二つの理由は、受験秀才だった人間が大学で経験する定番コースだ。

第三の理由は、自然科学というものに対する失望である。

私の内面の問題としては、これがやっぱり、いちばん大きかった。

大学に入って理科系の基礎トレーニングのコースを受けはじめ、そして学習に専念する友人たちの姿を見て、私はしだいに「醒めた」感覚を自然科学に対してつのらせていく。私がめざしていた自然科学って、こんな無味乾燥なテクニックの集積じゃなかったはずだ。それはもっとダイナミックな、心躍らせて世界と宇宙と精神の神秘を解明してゆく試みだったはずだ。あくびをしながら学生の実験指導をする教師の姿や、ただ順序よく整然と積み重ねられている数学や物理の公式群、そして講義では毎回微分方程

式の解法の羅列。それらに触れるたびごとに、私は間違った場所に来てしまったのではないだろうかという不安に襲われた。

もちろん、たかが教養の理系の授業を受けただけで自然科学一般に失望するなんて、傲慢もいいところだと言われるかもしれない。それはたしかにその通りだと思う。そういうわくわくすることは、基礎の修練を積んで、専門に進んでから、目の前に開けてくるのかもしれないのだから。実際、化学の分子の立体構造の授業などは、例外的に面白かったわけだし。だから、がまんして、【２６】もう少し先にまで進んでみることをせずに、ほんの出だしのところで自然科学を放棄してしまった私は、たしかに傲慢で横着な人間だったのかもしれない。

しかし、将来一流の専門家になるであろう同級生と机を並べ、そして科学者として一流であるはずの先生方の姿を毎日見ることで、私はやはりなにかを嗅ぎとっていたのではないかと思う。自分の求めているものは、この集団の中からは生まれてこないのではないかという予感を、嗅ぎ分けていたのだと思う。その後、専門の科学者の卵となった友人たちの姿を見ても、そこに、宇宙と人間の神秘をわくわくしながら解明しているという興奮を見ることは少なかった。いまとなれば、私の直観は正しかったことがはっきりと分かる。現代の巨大科学は、官僚制と同じような構造を

していて、大多数の科学者は複雑なチームの一歯車として日々の仕事をこなしているにすぎない。小さな発見や仮説の合間から、自然の巧緻を垣間みる喜びや興奮はあるにしても、それを宇宙や人間や自己の解明に直接つなげるには、現代科学は複雑になりすぎている。

こういう話をすると、君は自然科学を否定したいのかと誤解されることが多い。もちろん、そんなつもりはまったくない。私が言いたいのはただひとつ。私がほんとうにやりたかったことは、自然科学の内部ではできない、ということ。私がほんとうに欲しかった答えを、自然科学はけっして与えてはくれないということ。それだけだ。自然科学を天職として感じることのできる人は幸せである。私はけっして、そういう人にとっての自然科学を、否定したりはしない。

要するに、私は大いなる誤解をしていたのだ。

私は、自然科学を、宇宙が存在する意味とか、生とは何か死とは何か、人生の意味とは何か、【27】私はなぜ存存するのか、そういう疑問に答えてくれるものだとばかり思っていたのだ。そしてそれが誤解であることに、大学入学直後に気がついたというわけだ。その後、科学哲学やら、科学史やらをかじることで、それは決定的となった。

私は入学一年目にして、最大のアイデンティティ・クライシス（自分の信じていた自己像が崩壊すること）に陥った。いままで自分がめざしていたものが、誤った目標だと分かったことのショック。ほんとうに目の前が真っ暗になった。大学の授業に行くのはやめたが、そのかわりに何をすればいいのか分からない。昼夜逆転の生活をして、やることといえば遊びだけ。そんな毎日が続いた。

当時の心境はと言えば、まっすぐな線路が目の前はるかかなたにまで続いているのだが、自分が乗っていた汽車は大破してしまって、私はひとり線路のわきの草原に投げ出されている。そういう感じだった。けっして自然科学というものを嫌ったり、憎んだりはしていなかった。私の中にある知性ははっきりと自然科学的なものであったし、数学のパズル解きや、次々と報道される科学的発見のニュースには、やはりいつもこころ躍らされた。いまでも、そういう思いは強く残っている。自分は、本来ならば、科学者になるはずの人間だった。実験室に朝までこもって、新発見の喜びにすべてを賭ける科学者になるはずだった。そうやって、自然界の神秘に一歩一歩着実に迫ってゆくという、学問の王道を歩んでいるはずだった。自然科学の道を、その初期の時点で自覚的に引退してしまったという負い目は、私の心の底にいまでも残っ

ている。

さらに思い返してみれば、私が自然科学者になろうと思ったのは、たんに数学や物理といった【２８】知的ゲームが得意だったからだけではない。高校生の頃、私は、ある科学者にあこがれていた。自分もあんなふうになりたいと、こころから思っていた。それは、映画「ゴジラ」に出てくる片目の科学者、芹澤博士である。自分の開発した最終兵器オキシジェン・デストロイヤーを抱えて、水中に潜むゴジラに向かって自爆していく、あの人。人類を救うために、人類が生み出した悪＝ゴジラと闘った科学者。それが私の理想の人だった。私にとって、科学とは、たんなる知的ゲームでも、純粋な発見の喜びの追求でもなかった。科学とは、人類を救うべきものであり、人類が生み出した悪と闘うことそのものだったのだ。そういう、いまから考えればロマンチックな、気恥ずかしいような感覚を、私は自然科学に対してもっていた。

大学生になってもなお、私はそのような科学観を、こころのどこかに残存させていたのだと思う。人類を救うための科学の一員となるのだという夢を、無傷のままもっていた。だから、大学の自然科学の授業に失望したときに、余計にこたえたのだと思う。

そのころ、大学のキャンパスには、新々宗教の勧誘があふれていた。学生を集団生活させて社会問題を起こしていたＧ研や、親

鷺の教えを学びませんかとしつこく誘ってくるＴ研究会や、その手のグループがうようよしていた。私も無数に声をかけられたし、Ｔ研究会の学生や、日蓮宗系のＳ学会の人とはつっこんだ討論もした。私は理系の学生だったから、科学では生と死の問題は解けないという話題からよく入った。その点は彼らもすぐに同意してくれた。しかし、私は、あなたの宗教でどうして生と死の問題に解答が出るのか、それを証明してくれというふうにがんばったと記憶している。彼らは、結局、聖典に真理が書いてあるから、それが正しいのだという【２９】トートロジー（同語反復）でしか答えてくれなかった。その答えは、科学者をめざそうとしたことのある私にとっては、納得がいかなかった。

この時期に私が新々宗教に勧誘されなかったのは、ひとつには彼らの勧誘の仕方がへただったせいかもしれない。いまから振り返ってみると、もしこの時期に、神秘体験から入ってゆく方式の勧誘に出会っていたら、興味を示していたかもしれないなと思う。だとしたら、たまたま私がそういうものに出会わなかっただけで、私が新々宗教に入らなかったのはやっぱり偶然なのかもしれない。

入力：佐川弘之